

「クイルズ」

“Quills” ●●●第3回



フィリップ・カウフマン監督による不道徳にして滑稽、セクシーにして恐ろしい、美徳と悪徳が混在したこの映画は20世紀フォックス配給。

“In conditions of adversity, the artist flourishes”.

「逆境のなかでこそ芸術家は成功する」

マルキ・ド・サドにインスピレーションを得た優雅にして陰惨な映画「クイルズ」。きわめて緻密に作りこまれた作品は同時に、計算された格調高い英語の響きにもあふれている。

文=中野香織



親愛なる読者の皆さん。淫らな物語を聞かせましょう。

こんな語りとともに映しだされるのは、マスクをかぶった大男の薄汚い手に抱えられて嗚咽をもらす貴婦人です。思わせぶりの語りと映像がエロティックな緊張を濃密に高めたところでカメラが引くと、そこはフランス革命の貴族処刑のシーンでした。「痛みを与えることにおいて達人」と形容されたマスクの男は死刑執行人だったわけです。官能的な情景と見えたものが、実は恐怖の惨劇。揺さぶられた感情の落差にとまどう間もなく、ギロチンの歯が貴婦人のうなじめがけて落下する。ここぞと語られる決めの一文が、場面の意味を哲学的にします。

How easily, dear reader, one changes from predator to prey. (なんと容易に人は捕食者から獲物へと化するのだろうか)

タイトルが映しだされる前に展開するこれだけのシーンは、今回の映画「クイルズ」全体のトーンを象徴します。実在のマルキ・ド・サドにインスピレーションを得た虚構の物語ですが、エロティックなコメディのタッチも帯びた前半の伏線が、後半の残酷なクライマックスへと収束するのです。惨劇の背後に政治ありという構造も、冒頭のシークエンスが暗示する通りです。

さて、'from predator to prey'という計算された英語の響きからもわかるように、この映画の英語は、きわめて緻密に作りこまれています。舞台劇の映画化であるうえ、時代と場所が18世紀末フランスですから、セリフの英語がわざとらしいと感じられる方もあるかもしれません。しかし、練られたリズムによって格調高く発せられるセリフは、耳に音楽的な快感となって響き、それがエロティックな内容であれば、知性にくるまれた官

能が放つ独特の効果を発揮します。たとえば、このセリフ。ド・クルミエ神父（ホアキン・フェニックス）が経営するシャラントンの精神病院で、優雅な執筆生活を送るサド侯爵（ジェフリー・ラッシュ）が神父にワインをすすめてこう言います。

Conversation, like certain portions of the anatomy, always runs more smoothly when it's lubricated. (会話も、人体のある部位も、潤っているほうが滑らかにすすむ)

セクハラおやじの一人満足ギャグすれすれの内容も、こんな文語的で硬質な英語で表現されると、何やら高尚に聞こえるうえにチャーミングです。一昔前に活躍した語彙豊富なAV女優が駆使するレトリックもこれに似たものでした。ワインの来歴を語るサドのレトリックもこの路線にあります。花嫁の子宮に入れたぶどうを花婿が'vessel' (導管)でおしつぶして搾ったジュースから作ったボルドーのレア・ヴィンテージもの、という口上です。そのお味のコメントが、次のセリフ。

Full-bodied flavor. Just a hint of wantonness. Bottoms up. (フルボディ。かすかに淫乱のにおい。乾杯)

これぞほんとのフルボディ。って笑っていられるのもつかの間、洗濯女マドレーヌ（ケイト・ウィンスレット）の協力によって病院の外で出版されてしまったサドの本はナポレオン皇帝の怒りを買って、サドを矯正するべくコラル博士（マイケル・ケイン）が送り込まれてきます。もちろんサドはおとなしく矯正されるようなタマではなく、かえってコラルを挑発するようなことをやらかして、羽ペン (quills) と紙を奪われる。しかし、抑圧すればするほど現れてくるのが本物の才能。

'In conditions of adversity, the artist flourishes.' (逆境のなかでこそ芸術家は成功する)

とうそぶいて、サドはチキンの骨とワインをペンとインクの代用にしてシーツに書きます。それも奪われるとガラスの破片と自分の血を使って洋服に書く。さらにそれも奪われて素裸にされ、ひどい拷問を受けるのですが、サドはひるまない。

矯正者コラルがサディズムの実践者としてエスカレートするにつれて、サドが純粋な芸術家として昇華するかに見える皮肉な対照。サドのほうは書く手段を奪われ尽くしてもまだ口述という方法に頼ります。これが思わぬ惨劇を招き、舌を抜かれることになるのですが、それでもなおサドの「書く病気」は矯正できない。自分のfilthというインクがあるではないか！ **'The stench.'** (くさい)。にもかかわらず、汚物まみれのサドの姿がsublime (崇高) に見える瞬間でもあります。

天使のようなクルミエ神父を演じるホアキン・フェニックス、最初はこんな似合わせ役でどうしたのかと思いましたが、サドやマドレーヌとの関わりのおかげ次第に精神のバランスを崩していき、ついにはコラルに、

Some men are beyond redemption. (矯正不可能な患者もいる。)

なんて言われるまでにイッチャった顔を見せるあたり、「矯正不可能性にこそ本物の才能あり」という法則を補強するような突き抜けぶり、いいです。ただし、これは天才だけに適用される法則です。多くの凡人の場合、矯正不可能性はただの偏屈。 **Don't flatter yourself.** (カンちがいはいけません)。クルミエ神父のセリフです。